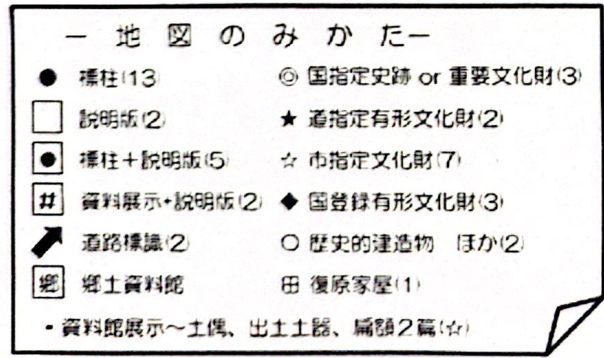


えべつ文化財マップ
(標柱・説明板・道路標識・指定文化財など)



揚水ポンプ #

R7_04_10 現在

江別の先史時代年表

年代(西暦)	本州の時代区分	北海道の時代区分	江別の土器文化	江別の主な遺跡	北海道に関する主な出来事	
BC.23,000	旧石器時代	旧石器時代		(大麻13遺跡)	・北海道に人が住みはじめる ・細石刃が使われる ・有舌尖頭器使われる	
BC.11,000	縄文時代	縄文時代	草創期	(大麻1遺跡)	・土器が使われはじめる ・弓矢が使われはじめる	
BC.7,000			貝殻文土器群 束剣路皿式土器群	坊主山遺跡 大麻6遺跡・大麻13遺跡・吉井の沢2遺跡	・貝殻文土器が使われる	
BC.4,000			縄文尖底土器群 円筒土器群 大麻5式土器	吉井の沢1遺跡 大麻5遺跡・大麻6遺跡	・気候が温暖化、縄文海進がはじまる ・各地に貝塚が残される	
BC.3,000			萩ヶ岡土器群 北筒式土器群	萩ヶ岡遺跡・上江別1遺跡・高砂遺跡 東野幌4遺跡・高砂遺跡・西野幌3遺跡・西野幌11遺跡	・東北地方や道南に大規模集落が残される	
BC.2,000			余市式土器群 手稲式土器群	高砂遺跡 吉井の沢1遺跡・吉井の沢2遺跡・七丁目沢2遺跡	・ストーンサークルや周堤墓が築かれる	
BC.1,000			晩期	タンネットウシ式土器	高砂遺跡・七丁目6遺跡・刈雁2遺跡	・東日本に亀ヶ岡文化が広がる
BC.300		弥生時代	続縄文時代	大狩部式土器群 恵山式土器群	高砂遺跡・大麻3遺跡 元江別1遺跡・旧豊平河畔遺跡	・金属器が伝えられる ・道南に恵山式文化、道東に宇津内・下田ノ沢文化が成立する
300				江別木式土器群	江別太遺跡・旧豊平河畔遺跡	
600		古墳時代		後北式土器群(江別式土器) 北大式土器群	坊主山遺跡・萩ヶ岡遺跡・西野幌12遺跡・大麻21遺跡・大麻22遺跡 町村農場1・2遺跡・大麻3遺跡・吉井の沢2遺跡	・オホック文化が樺太から南下する
800				擦文時代	擦文式土器群	萩ヶ岡遺跡 後藤遺跡(江別古墳群)
1200	アイヌ文化期	(鉄鍋)	○江別チャシ ○元江別1遺跡			・土器が消滅し鉄鍋が登場する
1400			室町時代	・道南に館が築かれる ・コシャマインの戦いがおこる		
1700			江戸時代	・松前藩が成立する ・場所請負制が成立する		

縄文時代の土器【8500年前～4500年前】

①

東釧路式土器《縄文早期》

東釧路式土器は、Ⅰ～Ⅳに細分され、江別市内では大麻6遺跡などでⅢ式が多く発見されています。東釧路Ⅲ式は、口縁部に比べて底部が小さく、くびれているのが特徴です。文様は、縄を転がしたり押し付けたりしたものや、棒などに縄を巻きつけたものを転がしたりして付けられています。



大麻5式土器《縄文前期》

市内の大麻5遺跡から発見された土器によって設定された型式で、道南～青森県を中心に広がった円筒下層式土器の仲間になります。

横から見た器形は口縁部・胴部・底部の幅がほとんど同じ筒型の器形をしています。

表面全体に縄文が施され、口縁部には縄を線状に押し付けた文様（縄線文）が2～3本見られます。また、内側にも縄文が付けられたものもあります。



円筒上層式土器《縄文中期》

東北北部～道南を中心に発達し広がった土器の型式です。土器の上部に粘土紐を貼り付け、口に突起を付けるなど立体的な文様構成が特徴です。江別市など道央部では、この形式から次の萩ヶ岡式土器につながると考えられています。



縄文時代の土器【4500年前～4000年前】

②

萩ヶ岡式土器《縄文中期》

市内の萩ヶ岡遺跡より出土した土器によって設定された型式で、1～4式に細分されます。東北北部～道南を中心に広がった円筒上層式土器の影響を受けています。厚く盛り上がった口縁部に4箇所突起（山形に突き出た部分）をもち、縄や棒・爪などを用いた文様が付けられています。



萩ヶ岡1式



萩ヶ岡2式



萩ヶ岡3式



萩ヶ岡4式

萩ヶ岡1式・2式は、4箇所ある突起のすぐ下に縦方向の粘土ひもを貼り付け、それをつなぐように横方向にも粘土ひもが貼り付けられています。粘土ひもには棒や爪で模様を付けるほか、1式では縄、2式では縦半分に割った竹（半裁竹管）を押し付けた文様を付ける土器が多い傾向にあります。萩ヶ岡3式は、口縁部を1・2式より厚く作るようになりますが、その下の文様はシンプルになります。萩ヶ岡4式は、文様がさらにシンプルになり、突起が小さくなります。

北筒式土器《縄文中期》

道東・道北を中心に広がった土器型式で、道央部では萩ヶ岡式土器の後に作られるようになります。口縁部は厚く作られ、その部分に半裁竹管で刻むように文様が付けるのが特徴です。また、厚くした口縁部のすぐ下に竹をまっすぐ突き刺した円形の模様も付けられます。



縄文時代の土器【4000年前～2300年前】

③

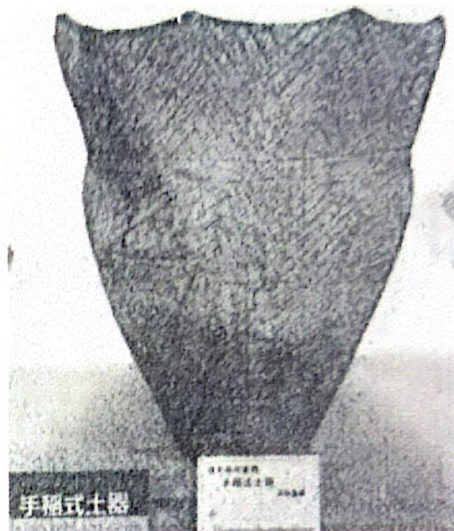
余市式土器《縄文後期》

余市式土器は、口縁部に比べて底部が小さい器形をしています。口縁部と胴部に太い粘土ひもを横位置に貼り付けている様子は、まるで樽をしめる「タガ」のようです。口縁部のすぐ下には、北筒式土器と同じように、竹を用いた円形の刺突文が付けられているものもあります。



手稲式土器《縄文後期》

縄文時代後期の北海道を代表する土器の型式です。縄文時代中期の円筒上層式土器からよく使われていた粘土ひもを貼り付ける文様技法は影をひそめ、縄文と先の細い工具で線を引く文様（沈線）が多く使われるようになります。土器の表面に縄文を付けた後、区画するように沈線を引き、所々に区画の縄文をあえて消して文様全体にメリハリを付ける技法（磨り消し技法）が用いられるものが多くみられるのがこの型式の特徴になります。



タンネットウI式土器《縄文晩期》

縄文時代晩期末に道央で作られた土器の型式です。東北地方の大洞式土器（亀ヶ岡文化）と道東の幣舞式土器それぞれの影響を受けた特徴がみられます。「エ」の字をくずしたような文様は大洞式、細かい縄文や口唇部に細い縄を押し付けた文様を付けたりするのは幣舞式の特徴を示し、丸底なのも特徴です。



えさんしき とき
恵山式土器

東北地方で作られた弥生土器の影響を受け、
 道南地方で成立した土器の型式で、道央で発見され
 た恵山式土器は、白老町アヨロ遺跡などの調査で
 研究が進み、アヨロ1～3類に細分されました。

アヨロ1類は、底から胴部にかけて外側にふくらみ、
 頸部(胴部の上半分から口の近くまで)はほぼ垂直、口
 縁部は外側に広がる器形なのが特徴です。

文様も器形に合わせるように、底から頸部のすぐ下まで縦方向に帯状の縄文が施され、
 頸部は無文(縄文が施されない)のが一般的です。

アヨロ2類は、頸部のメリハリが次第になくなり、アヨロ3類になると、胴部と頸部の区別
 がつかなくなります。胴部の下半分は縦方向、上半分は横方向に帯状の縄文が施され
 ます。

えべつぶとしき とき
江別太式土器

恵山式と江別式の間近な特徴を示す土器の
 型式です。江別太遺跡で行われた地層ごとの調査で、
 恵山式⇒江別太式⇒江別式の順で型式が変化す
 ることが解明されました。恵山式の特徴だった器形のメ
 リハリがさらになくなり、お寺の鐘をひっくり返したよう
 な器形になります。

土器の下半分は縦方向(帯状の縄文)、上半分は
 横方向に文様が施されます。さらに上半分には、
 格子状やジグザク状の沈線も付けられます。また、口
 の4か所に小さな突起が付けられます。



続縄文時代の土器【1700年前～1500年前】

⑤

江別式土器

江別式土器（後北式土器）は、河野広道氏によって、坊主山遺跡出土の土器を標識に設定された型式で、江北式土器は「後期北海道式薄手縄文土器」の略称で、古い順からA式・B式・C1式・C2式・D式に細分されます。

A式は、口に4つの突起を持ち、突起の下にV字やU字の粘土ひもが張り付けられています。口縁のすぐ下には1本の擬縄貼付文（細い粘土ひもに縄のような細かい刻み目を付けた文様）が巡らされています。



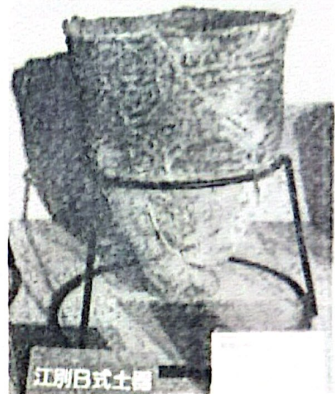
B式になると、擬縄貼付文は胴部まで広がり、三角形や菱形などの幾何学模様を描くようになります。

C1式では、幾何学模様から丸みを帯びた文様に変化します。そして貼付文はさらに細くなり、断面が三角形で線状の文様（微隆起線）になります。

C2式になると、微隆起線はダイナミックに円弧を描くようになり、器形は上げ底から平底になり、注ぎ口が付く土器も現れます。

D式は、C2式と同時期と考えられ、微隆起線はなく、縄文と小さな三角形が並ぶ列点文で構成されたシンプルな文様になります。

江別式土器の次に作られた北大式土器には、初期は江別C2式に類似する文様が施されるものの、すぐに姿を消し、それ以降土器に縄文が付けられることはなくなりました。



●樺太アイヌ



いしかりざいむゆう からふと
石狩在住の樺太アイヌ

いじゆう ついしかり じゅうきょ まえ さつえい
移住した対雁の住居の前で撮影



ついしかりがっこう
対雁学校

めいじ ねん がつ にち おこな しんこうしゃらくせいかいこうしき きねん
明治13年6月20日に行われた新校舎落成開校式の記念
しゃしん とき こうめい ついしかりがっこう
写真で、この時に校名を対雁学校とした。

●屯田兵



えべつ さいしよ にゅうしよく えべつとんでんへい へいおく
江別に最初に入植した江別屯田兵の兵屋

めいじ ねん はい ことんでん へいおく しき
明治11年に入った10戸屯田の兵屋で、アメリカ式の
へいおく だんろ まど たいかんじゅうたく
兵屋で、暖炉があり、ガラス窓の耐寒住宅でした。



しのつ とんでんへいそん た ようさんしつ
篠津の屯田兵村に建てられた養蚕室

めいじ ねん さんかいだ ようさんしつ た ようさん
明治9年に三階建ての養蚕室として建てられ、養蚕
ぎじゆつ しどう う ことにへいそん やまはなへいそん
技術の指導を受けるため、琴似兵村と山鼻兵村の
とんでんへい しゅっちよう
屯田兵が出張していました。



めいじ ねん にゅうしよく しのつとんでんへい へいおく
明治14年に入植した篠津屯田兵の兵屋

このとき にゅうしよく こ こへいみん
この時に入植した19戸のうち、士族が11戸、平民が
8戸で、めいじ ねん ぶんけ ことんでん よ
明治17年に分家して、20戸屯田と呼ばれて
いました。しき へいおく だんろ まど えべつ
ロシア式の兵屋で暖炉やガラス窓は江別
とんでん いっしょ ふう
屯田と一緒にですが、ログハウス風でした。

大麻地区の開拓と地名

- 明治22(1889)年 四番通(旧国道)の白石-江別間が完成
- 明治23(1890)年 旧国道が札幌までつながる
- 明治24(1891)年 旧国道沿いの大曲に上野氏他4戸が入植
- 明治26(1893)年 麻畑に福屋氏が入植
- 明治27(1894)年 大曲に伊藤氏、野幌屯田から移住(稲作に成功)
- 明治31(1898)年 麻畑に私設簡易教育所を設ける
- 明治32(1890)年 大曲では、小高い丘の所(今の大麻西小付近)に、小さいけれど日本古来の立派な神殿を造り、大曲神社としました
- 明治33(1891)年 麻畑では、四番通と13丁目通の角地の小高い丘に「八百萬神」を祀った麻畑神社を造りました
- 明治34(1892)年 麻畑簡易教育所が開校式
- 明治38(1905)年 樹林地では、屯田兵村の薪炭・建築材料用地として保護されていましたが、伐採後の跡地を小作地として解放し、鈴木氏などが入植して開墾を開始(十二錦山神社氏子)
- 大正 8(1919)年

同じ行政区にある3つの部落が、それぞれの神社の氏子として、別々にお祭りを行ってきましたが、ことあるごとに対立したりしていたため、何とかしようという動きが当時の青年会の中から出て、合祀のきっかけになりました。そして、大正8年、神社合祀の時に大曲と麻畑の一字を取って大麻神社と命名しました。

大正10(1921)年 野幌原始林が天然記念物に指定される

昭和10(1935)年 字名・地番改正により麻畑を行政的に「大麻」としました

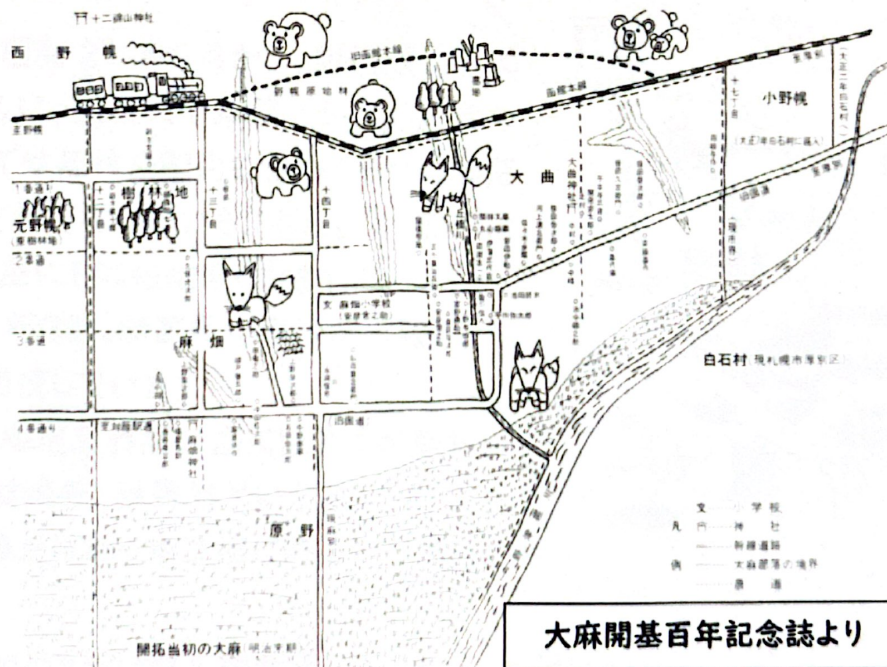
●大麻神社の由来から

明治33年、麻畑(現在の江別市大麻の一部)に最初に入植した福屋角助が大麻の小高い丘に「八百萬神」と記した角柱を建て祭りを行っている。同年、大曲の平本与三吉の宅地にも小祠を建立し祭祀し、続いて明石石之助も小祠を建立し「十二錦山神社」として開拓者の寄りどころとした。この3つの神社に、大正8年他地区にもあった

小祠の2柱を合祀し、現在の位置に本殿拝殿を御造営し社名を大麻神社と呼称し、この五柱神を「開拓祖神」として今日まで崇められている。

●御祭神

あまてらすおおかみ うがのみたまのみこと すくなひこなのみこと おおなむちのみこと はにやすひめのみこと
天照大神、稲倉魂命、少名彦名命、大己貴命、埴安姫命
⇒錦山天満宮にはこの五柱神の社日塔がある



野幌の開拓・北越植民社

明治 23 年5月、二代目社長関矢孫左衛門が引率して、野幌の地に 115 戸 410 名が入植し、みんなで助け合い、努力の甲斐あって、明治 33 年には 1360 町歩の田畑が成功付与されました。

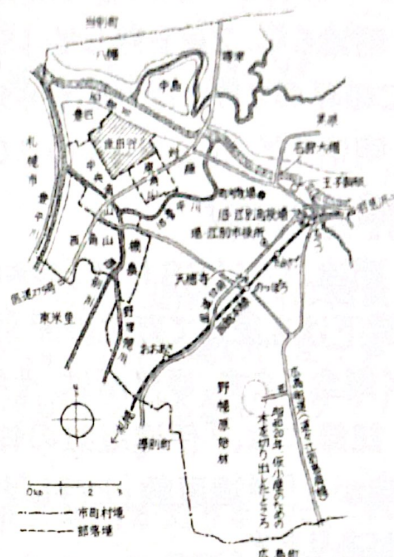
明治 24 年に米の試作が始まり、水害などを乗り越え、明治 29 年、稲作に成功し、この年 48 町5反、357 石7斗を収穫しました。試作から5年目のことでした。

明治 26 年には、野幌神社を造り、新潟から三条系神楽の大和舞楽を奉納したのが始まりで、現在は野幌太々神楽として受け継がれています。

世田谷開拓(拓北農兵隊)

昭和 20(1945)年3月、東京大空襲で罹災した人々を拓北農兵隊として緊急入植させます。江別には、7月9日、東京世田谷から 32(世田谷区史では 33)戸が来ました。同時に、杉並区や足立区・目黒区などの人々も来ています。

世田谷には、入植者の一人、山形トムのアトリエ「北の世田谷美術館」があります。角山には、世田谷の地名と世田豊平川という呼び名が残っています。

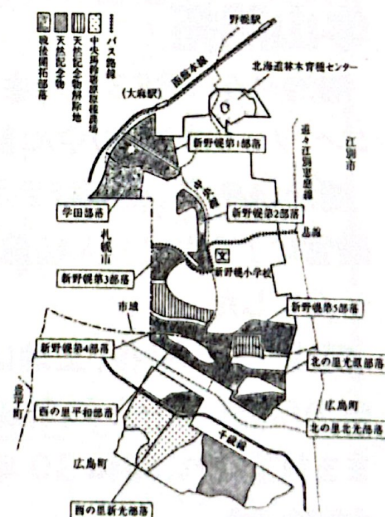


新野幌開拓

戦後の緊急入植として、昭和 20 年9月から、野幌原始林に入植しました。入植したのは、元軍人や軍属、満州引揚者など 115 戸でした。江別では森林公園内も含めて5つの部落を作り、大木を伐採して密林を開いていきました。第1部落は、今の文京台地区で、北広島にも開拓地を作りました。

森林公園内に昭和 23 年7月、新野幌小学校が開校しましたが、昭和 41 年3月に閉校しています。

昭和 43(1968)年、北海道立自然公園に指定され開拓は中止となり、第2・3部落は退去、新野幌という名称は、国道 12 号線と文教通りの交差点にある歩道橋にのみ残っています。



戦後の入植

世田谷開拓と新野幌開拓の2つは緊急開拓でした。特に、新野幌開拓については、江別だけでなく、当時の広島町にも入植しています。

この2か所以外にも、豊幌や美原、江別太や東野幌など全部で8か所に入植し、営農戸数は 377 戸、営農面積で 2600ha 以上の農地開拓が進みました。江別市の農地面積の実に 26%を占めています。

●北越殖民社



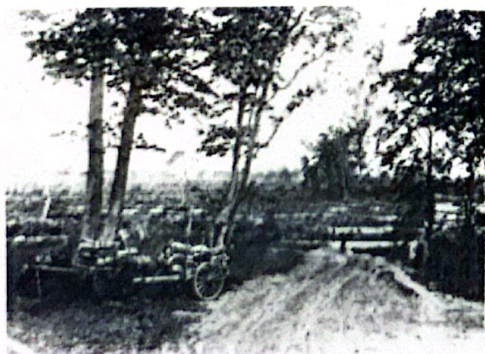
ほくえつしよくみんしゃ のっぽろ にゆうしよく めいじ ねん
北越殖民社が野幌に入植したのは明治23年ですが、
この写真は、しょうわ しょうわ ねん がつ にち かいそん ねん きねん
昭和14年6月30日に開村50年を記念
して「むら くさわけ めいじ ねん いじゆう ひとびと
村の草分け～明治23年に移住した人々」として
さつえい
撮影されたものです。



ほくえつしよくみんしゃ かいたく ようす
北越殖民社の開拓の様子ではありません。
しょうわ ねんだい しんのっぽろかいたく にゆうしよく だいにぶらく
昭和20年代の新野幌開拓で入植した第二部落の
かいたく ようす
開拓の様子です。
ま なかおく かいたくごや み
真ん中奥には開拓小屋も見ることができます。



しょうわ はじ ころ しよくじふうけい
昭和の初め頃の食事風景
ちゃぶだい かこ しよくじ
卓袱台を囲んでみんなで食事をしています。



めいじ ねんころ ほくえつしよくみんしゃ かいたくち
明治40年頃の北越殖民社の開拓地
せきやし いえ ひろしまかいどうがわ さつえい おも
関矢氏の家から広島街道側を撮影したものだと思われ
ます。

●野幌太々神楽

しょうわ ねん がつ にち えべつし むけいみんぞくぶんかざい してい う
昭和48年3月31日に江別市の無形民俗文化財の指定を受けました。

にいがたけん でんとうげいのう さんじょうかぐら う つ いずも かぐら けいとう
新潟県の伝統芸能「三条神楽」を受け継いだもので、出雲神楽の系統です。

その他の開拓

涌谷移民

明治4(1871)年、宮城県仙台藩涌谷領(当時は、登米県遠田郡馬場谷地村)の農民21戸76人が対雁に入植(涌谷から石狩の生振にも3戸、生振全体で、29戸124人が入植)します

明治5年8月、札幌借楽園から雁来を通り対雁に至る「対雁街道」が開通する。この年、冬の猛吹雪で凍死者も出ました。

明治6年、2戸を残して19戸は移転します。移転先は、元対雁村と呼んでいましたが、この年の9月には対雁から来たという意の「雁来村」になります。

明治9年、樺太アイヌの108戸854人を対雁に移住させます

伊達屋敷

明治14(1881)年、宇和島藩の最後の藩主から三代目の伊達宗徳が、150万坪の貸下げを受けて野幌の開発を計画しました。事務所を設置しましたが、入植希望者がなく断念します。事務所は、その後入植した北越植民社が使用しました。

記録には、「伊達屋敷の体裁は、五間三間の建物にて、屋根は板葺きなり」とあり、当時から「伊達屋敷」と呼ばれていました。現在でも、白樺通りのバス停に「伊達屋敷通り」があります。

牛山開拓

明治16(1883)年、牛山民吉率いる開成社が、幌向原野に3戸入植します。この地は、エベツプトコタンの中心部で、ペンケヨシュペと呼ばれました。

明治19年、北越植民社の記録によると、地の不良により同地を放棄したとあり、春の融雪による水害や入植前に入居する小屋掛けも許可されず、追加移住することができませんでした。

開成社の解散後、土地は明治25年に石田甚兵衛が購入、その後、大規模農場経営者の所有になります。幹線排水路は、昭和10年代になって一部着手しますが、未完のまま放置され、昭和30年代に完成しました。

越後村

明治19(1886)年、新潟県長岡で北越植民社が設立されます。貧窮農民を北海道開拓で救うという目的でした。

明治19年4月、大橋一蔵・大河原文蔵・大橋順一郎が江別太に移住し、空知郡幌向村江別太に支社(事務所)を置きますが、明治23年には野幌に事務所を移します。

同年6月、新潟県蒲原より9戸46名移住、7月には10戸となり、9月島根県石見の7戸25名を受け入れ、17戸で越後村となります。

しかし、明治22年2月、初代社長大橋一蔵、不慮の事故により死去。42歳でした。

江別の王子製紙はいつから？

「王子製紙社史」より

現在の王子製紙江別工場は、建設当時は富士製紙工場といい、明治39(1906)年に工場、社宅、専用鉄道線の建設が始まり、明治41(1908)年に操業を開始しました。

《江別に建設された理由は？》

- ① 石狩川と江別川(今の千歳川)の合流点にあって、石狩川や江別川の上流から流送されてくる原料木材を安価に集めやすい。
- ② 水資源が豊富で工場用水に事欠かない。
- ③ 鉄道線路沿いであり、札幌・小樽にも近いので、製品の運搬や物資の調達が便利である。
- ④ エネルギー源となる石炭の入手が容易い。

明治42(1909)年、当時の職員数は、約500人。この人たちが工場敷地内の職員住宅や職工長屋、職工合宿所、あるいは市街の借家などに住み、毎日工場の門を一斉に通りました。その朝夕の光景は、役場職員や教員以外で、江別における最初のサラリーマンの姿だったそうです。

大正3(1914)年1月18日、江別市街634戸中210戸に電灯が灯りました。これは支笏湖から流れ出る千歳川の水を使った王子製紙の苫小牧水力発電所から富士製紙に供給される電気から配電されたものです

明治41(1908)年 富士製紙北海道工場として操業開始

昭和8(1933)年 王子製紙・富士製紙・樺太工業社が合併し、王子製紙江別工場に

昭和19(1944)年 王子航空機江別製作所(木製戦闘機キ-106の製作)

昭和22(1947)年 北日本製紙産業として再出発

昭和45(1970)年 王子製紙江別工場(王子製紙と合併)



江別港と江別橋

遠方に見える高い煙突が、
富士製紙工場

●明治から大正へ



たいしょうちゅうき かしてん
大正中期の菓子店

ちゅうおうどお や かしてん えべつようかん ほんばい
中央通りにあったあさひ屋菓子店で、江別羊羹も販売して
いました。この頃には商店もそれまでのよろず屋から次第
に専門店化するようになりましたが、まだ菓子店でお茶を
売っていたことがわかります。



えべつばしがわ み ていしゃばどお
江別橋側から見た停車場通り

みぎ しょうてん いわたしょうてん ひだり しょうてん えちごやごふくてん
右の商店は㊦岩田商店、左の商店は㊧越後屋呉服店
です。



えべつえき こうない み えべつしがいち
江別駅の構内から見た江別市街地

てまえ ひ こ せん めいじ ねんいこう ばんめ えきしゃ
手前の引き込み線から、明治24年以降の2番目の駅舎と
おも
思われます。



げんおおあさにしまちこうえんあた さわ か りくきょう
現大麻西町公園辺りの沢に架けられた陸橋

はし べんけいごう おも
走っているのは、弁慶号と思われます。

とうじ さっぽろえき えべつえき じかんいじょう
この当時、札幌駅から江別駅まで1時間以上かかっていま
した。



えべつこう ていはくちゅう かわふね
江別港に停泊中の川船

ころ えべつがわ げんちとせがわ きゅうゆうばりがわ つか ながぬま
この頃は江別川(現千歳川)や旧夕張川を使って長沼や
えにわ ちとせ しゅううん さか
恵庭・千歳との舟運も盛んでした。



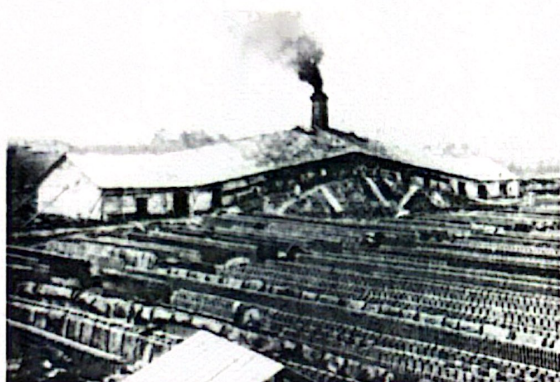
いしかりがわこうろ しゅうこう かみかわまる
石狩川航路に就航していた上川丸

えべつばしがわ と えべつこう しゃしん おく ふじせいし
江別橋側から撮った江別港の写真で、奥には富士製紙
こうじょう たてもの み
工場の建物も見えています。

● 窯業

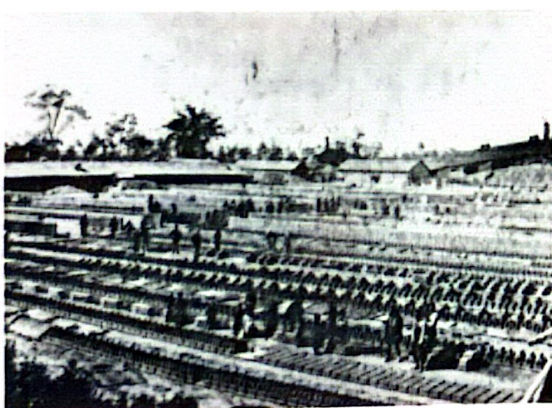


さっぽろしろいし すすきれんがこうじょう しよくこう
札幌白石にあった鈴木煉瓦工場の職工たち
(明治19年頃)の写真です。江別市の指定文化
財である「火薬庫」は、この鈴木煉瓦でつくられ
ており、幾つかのレンガには、鈴木煉瓦の㊦の
刻印があります。



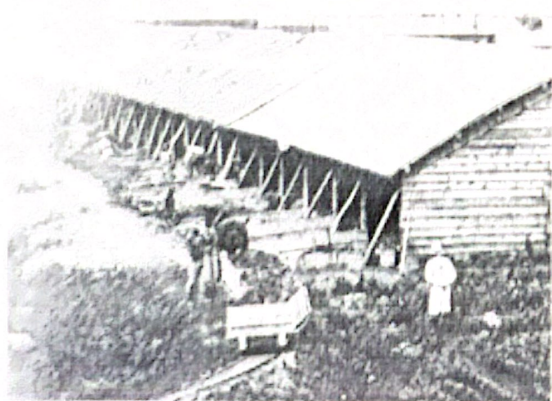
ほっかいどうたんこうてつどうかぶしきがいしゃ のっぽろれんがこうじょう
北海道炭礦鉄道株式会社野幌煉化工場の4
号登り窯(明治31年頃)の写真です。

しりょう のっぽろれんがこうじょう ほっかいどうたんこう
資料によると、野幌煉瓦工場は、北海道炭礦
鉄道株式会社の煉瓦を自給する目的で、明治3
1年4月に幌内線野幌駅の東方に敷地53町歩



つば
(15万9000坪=エスコンフィールド北海道10
個分以上)を購入し登り窯6機を設け煉瓦製造
を開始したとあります。

ひだり しゃしん のっぽろれんがこうじょう かんば めいじ
左の写真は、その野幌煉化工場の干場(明治
31年頃)の写真です。



いわたれんがこうじょう ふなば たいしやう ねんこう しゃしん
岩田煉瓦工場の船場(大正7年頃)の写真で
す。

どとりば よ げんりやう さいくつば じんりき
土取場と呼ばれる原料の採掘場から、人力によ
って採掘した原料をトロッコで馬搬しています。こ
の原土に水や砂を混ぜて煉瓦の元になる土を作
りました。